

# 蓄積される罪と罰 — 古代の道教思想から現代へ

菊地 章太

## はじめに

国際哲学研究センターにおける私たち第三ユニットの共通の課題は「共生」である。ともに生きることが課題となるその前提には、多様な人々がいて多様な考え方があるという現実がある。異なる文化、異なる常識、異なる価値観を持つ人々が、ひとつの世界のなかでともに生きていく。そこでは何が求められるのか。まずは相違を肯定する。そこから他者の尊重ということが出てくるであろう。多様性を許容する。そのうえで自立と連帯も可能になるであろう。そのとき共生への歩みが始まるのではないか。

そうした課題のもとに、ここでは二千年前の中国の事例を取りあげたい。キーワードは「承負」である。人々が犯した罪は徐々に蓄積されていく。後の世に生きる者たちがそれを承けて負う。これが承負の意味するところである。そのような古代世界の思想が今の時代にどう関わってくるのか。今日的な問題に対して思索の手がかりになるのか。また、東アジアの局地的な思想がどこまで世界規模の普遍性をもつことができるのか。あるいはできないのか。あわせて考えてみたい。

## 1. あとの者が罪を負う

後漢の時代、西暦は二世紀である。干吉という男が「神書百七十卷」を得た。正史『後漢書』にその次第が記されている<sup>(1)</sup>。神書の名は「太平清領書」という。内容は陰陽説にもとづくものの「巫覡の雑語」が多いとある。巫は女、覡は男の霊媒である。彼らのあやしげな言辞に満ちているということか。干吉の弟子がこの書物を皇帝に献上したが、かえりみられなかった。のちに張角と名のる男がそれを手に入れた。

張角は多くの信者を集めた。神書の名にもとづいて太平道を名のり、病氣治療を看板にかかげた。霊帝の中平元年(184)、張角は信者をひきいて蜂起した。黄河の下流から数十万もの人がしたがった。彼らは目じるしに黄色い頭巾をつけたので、黄巾の乱と呼ばれる。豪族の大土地所有が加速した時代であった。それまでの村落共同体が崩壊していく。土地を失った人々は奴婢となり、あるいは流亡し、あるいは餓死した。この時期は中国史上に例を見ないほど人口が激減したといわれる。生きながらえた難民の群れが、物資の集まる大河の流域へ流れこんだ。そこで武力抗争に荷担したのである。

とてつもなく大量の犠牲者をだして反乱は鎮圧されたが、その後も十年以上にわたって残党が蜂起をくりかえした。古代中国における最大の宗教反乱であった。この混乱によって後漢王朝も打撃をこうむり、ついに立ち直ることができなかった。後漢の滅亡は、霊帝の次の献帝の建安二十五年(220)である。

太平道を突き動かした力とは何だったのか。そのもとになった「太平清領書」は、その後どうなったのか。

道教經典の集大成である道藏のなかに、百十九卷からなる『太平経』がある。なかば以上は断章であり、完全なのはわずかに五十七巻にすぎない。これが「太平清領書」の残存物と考えられている。敦煌写本中にも断片が伝わる。残っているだけでも大部な書物である。そこには世界観や生命観にかかわる実に多くの主題が登場する<sup>(2)</sup>。中国宗教思想の一大パノラマが示されたごとくである。ではその要点はどこにあるのか。

天地のはじまりには<sup>おお</sup>太いなる平らかな世があった。ここに尽きている。太平の気が世界に満ちていた。世界は均衡をたもっていた。しかしこういう理想的な状態はいつまでもつづかない。いつしか不調和が広がっていく。やが

て世界は不均衡な状態へと転落していく。こうした悲観的な見方がひそんでいる。下降的な歴史観がそこにはある。

上古こそは太平であったという意識がこの時代の人々にあった。あるいは中国にありつづけた、と言うべきかもしれない。さかのぼって前二世紀までに成立した『礼記』は、大いなる道の行なわれていた上古を「大同」の世とする。大同と太平は通じあう。これに対し、もはや道のすたれた現在は「小康」の世であるという<sup>(3)</sup>。くだっては五世紀の陶淵明は「勸農」のなかでうたった。「悠々たる上古、そのはじめに生きる民、傲然としておのずから足り、朴をいだし真をふくむ」と。

過去に理想の世のなかが実現していた。現在は悪しき状態にある。『太平経』ではこうした変化を「承負」という言葉を用いて説明する。「承とは前〔さき〕のことであり、負とは後のことである」という。先人たちは天の心のままに生きていたが、少しずつその心を失っていった。その罪は知らないうちに積み重なってふくれあがり、のちの世を生きる者が罪なくして災禍をこうむっている。だから、「前のものを承けて後のものが負う」のだという<sup>(4)</sup>。

人が罪を犯す。その罪は自分一個のなかでは解消しきれない。次の世代にそれは持ちこされ、徐々に蓄積されていく。前の世代の罪を承けて後の世代が罪を負う。それは一個人の問題ではない。社会がひとりひとりの人間からできあがっている以上、社会全体の罪という方向へも拡大する。その結果が悪政や戦乱となって現れる。さらにそれは自然界にまで波及し、凶作や天災となって現れる。

そうした罪の蓄積と罰の増大は、天地がはじまって以来、絶えることなくふくれあがってきた。『太平経』はこれを「天地開闢以来の帝王と人民の承負」と表現する<sup>(5)</sup>。宇宙創生にさかのぼる遠大な時間のなかで、積もりに積もった人類の罪が問われている。

それでも世のなかは確実に動いている。宇宙はたえまない運動をつづけている。世界は大いなる循環をくりかえす。人々はそう考えた。それは天地の法則である。自然界を気がめぐっている。太平の気がめぐり来るとき、太平の世がふたたび復活するという。

## 2. 相関する自然界と人間界

太平の世はめぐる。こうした考え方が太平道蜂起の根底にあった。

今や天地はひとつの周期を終えるという。やがて時が至れば、宇宙は再生する。そのとき原初の世界がよみがえり、太いなる平らかな世がおとずれる。清新の気が宇宙全体を覆うであろう。漢王朝が滅んで新しい時代が到来する。太平道の信者たちが求めてやまない王国が実現する。ここでは宗教的な理念が王朝滅亡という現実と不即不離に結びついている。こうしたありようが、以後の中国史に登場する宗教反乱に、ひとつの規範を提供することになった。

結果として太平道のめざした理想社会は実現しなかった。しかしその理念はのちの中国思想のなかに受け継がれていった。実現しなかったからこそ、かえって理想は生きつづけたとも言えるだろう。

ところで、自然災害がなぜ人間の罪に起因するのか。

自然は恩恵をもたらす。そして脅威をもたらす。ほしいままのいとなみである。そのよってくるところを知るすべは人間にはないのか。そうした欲求のもとで古代的な思惟がはじまる。自然界と人間界にはなんらかのつながりがありはしないか。両者のあいだに相関関係は認められないか。自然現象は人間社会の営為が反映したものでないかと人は考える。こうした災異に対する中国人の思惟は、漢代の儒教において展開した。そこでは、災異とは天が人間のあやまちを咎めるため、あるいは戒めるためにくだすものとされた。

前漢の武帝は即位後、儒者董仲舒に政道のありようについて意見を求めた。問答は『漢書』に記されている。武帝が問う。災異は何が原因で起きるのか。董は答える。「国に道をたがえるあやまちがあれば、天はまず災害を起こしてこれを咎めるでしょう。それでも反省しないときは、さらに異変を生じさせて戒めをあたえるでしょう」と<sup>(6)</sup>。それは儒教の聖典である歴史書『春秋』をひもとき、過去に起きた事実にかんがみて導き出された公理である。言うならば、「天と人とのあい照らしあう関係」だという。

君主が心を正し、万民を正して国が治まっているとき、世のなかはどうなるか。董はつづけて言う。そのとき陰陽の気は調和し、風雨は時節にかなうであろう。人々はむつみあい、みなが生産にはげむ。五穀は実り、草木は茂る。天地のあいだにあるものはうるおい、ゆたかでうるわしい大地が実現する。このように万物が調和し、社会が平和であるのは、君主が国を正しく治めているからである。しかし政治が乱れているとき、ことごとく反対の状況が現れるという<sup>(7)</sup>。

董仲舒は春秋学の創始者として知られる。その災異思想とは、過去の災変をかえりみて、そこに天の意思の現れを見いだそうとするものであった。世界の安定と繁栄は善政のたまものである。天地の異変と災害は悪政のしからしむるところである。そのように判断された。それはすでに起きた事実にかんがみ、為政者に警告を発して反省をうながす思想であった。かくして自然現象としての天変地異が人間の営為との関連において把握され、倫理的な認識の対象へと転化されたのである。後漢道教の承負の思想に至るまではまだ距離があるが、その淵源はやはりここにある。

### 3. 罰を受ける個人と集団

道教における承負の思想と仏教の因果応報との違いはどこにあるのか。

仏教では考える。何事であれ原因のあるところには、かならず結果が生じる。何事かをなせばその行為に応じて、その報いがいつかどこかに現れる。それがよいことであれば、よい結果が、悪いことであれば、悪い結果が現れる。それはその人が生きてあるあいだに現れることもあるだろう。だが生きてあるあいだに現れないこともある。これは私たちの身近にいくらでも経験することではないか。

私たちの生が一度きりで尽きてしまうなら、それきりである。しかしインドの人々はそうは考えなかった。私たちは生まれては死に、死んでは生まれ変わる。それをずっとくりかえしていく。だから今生きているあいだに結果が現れなかったとしても、悲しむことはない。喜ぶのはまだ早い。いつか生まれ変わったその先で、かつて生きていたとき作りだした原因の結果が実現するからである。前世の報いが来世に持ちこされる。蓄積された善は承けつがれ、果報がきつとおとずれる。蓄積された罪は承けつがれ、罰を負うさだめにある。どんなことがあっても逃れるすべはない。

ただし、あくまで個人が単位である。犯した罪の報いはつねに自分自身に返ってくる。どれほど生まれ変わりをくりかえそうと、いつか自分が負うしかない。他人が肩代わりすることはできない。他人になすりつけることもできない。「親の因果が子に報い」というが、それはあり得ない。先祖の罪を子孫が負うという発想は、少なくとも本来の仏教の教えにはない。ましてや社会全体にそれが波及するなど到底考えられない。道教の承負の思想とはここが根本的な相違点である。

過去に犯した罪を今つぐなう。あるいは未来につぐなう。これだけならば南アジアと東アジアで違いがない。しかし前者では個人の範囲で完結している。生まれ変わったその人自身がつぐなうのである。後者では集団にまで範囲が拡大している。子孫が総出でつぐなうのである。集団の単位はやはり一族である。ここに東アジアの面目が躍如としている。『周易』の「文言伝」に言う。「善を積んだ家にはかならずや子孫にまでおよぶ福德がある。不善を積んだ家にはかならずや子孫にまでおよぶ災禍がある」と<sup>(8)</sup>。

「文言伝」は『周易』を解説した孔子十翼のひとつで、古来孔子の作とされてきた。この文は儒教の立場からの言説として重要である。道教には儒教と対立する部分も多々あるが、儒教に立脚し、あるいは同化している部分もまた少なくない。親の因果が子に報いることは、中国ではむしろ民族の伝統と言ってもよいのである。

世界は循環をくりかえすという。この考え方も仏教にある。そこでは、世界は生成し、存続し、崩壊し、空虚になる。そしてふたたび世界は生成する。その無限のくりかえしのなかに世界はある。五世紀はじめに漢訳された『長阿含経』の「世記経」は、この四つの時期を「四事」あるいは「四劫」と呼んでいる<sup>(9)</sup>。それは途方もないスケールで展開する自然のサイクルである。そこにはなんの意志も介在しない。人間の営為とはまったくかわりがない。王朝革命などおよそ縁もゆかりもないことである。

中国的な思惟のなかでは、世界は陰陽の気の消長に応じて再生をくりかえす。天地は崩壊したのちふたたび開闢

する。とはいえ、それは太平が実現されていた上古の世が復興するのであって、神の国である新しいエルサレムが地上に現出するのともまったく異なる。かつて存在しなかった新たな位相への転位は、ここでは考えられていない。希求されているのは理想の王朝の再来である。

かくして東アジアでは宗教も現実の政治に引き寄せられていく。南アジアでは宗教と政治が截然と分けられている。これが西アジアであれば政治までもが宗教に組み込まれている。あざやかな対照をなしている。

## おわりに

哲学の分野において世界規模の連携を構築することが国際哲学研究センターの目標のひとつとされる。そのためにはさまざまな時代や地域における思想の差異を明らかにすることが肝要だと思う。根本的な相違点が明らかになったうえで、共通点や接点をさぐる必要があるのではないか。そこから対話の可能性も開けてくるであろう。

加えるに、哲学が過去のものでなく現在のものであるためには、どのようなアプローチが可能か。伝統的な思想や宗教を研究している第三ユニットの私たちにできることとしては、今日的な問題の根源を、過去の膨大な知の遺産のなかに探っていく作業が考えられる。思うに、独創的な思想は、限定された時代に、限定された地域で、限定された条件のもとに生成する。それが特殊な、個別的なものであればあるほど、かえってどこかに普遍性を宿すことがありはしないか。

ここで取りあげた人類の罪とその報いという考え方を、ただちに天災にあてはめることはもはや許されないだろう。しかし人災というレベルでなら、私たちの国が直面している問題につながる場所があるに違いない。

## 注

- (1) 『後漢書』卷三十「襄楷伝」中華書局点校本第四卷、p.1084「初順帝時。瑯琊宮崇詣闕。上其師干吉。於曲陽泉水上。所得神書百七十卷。皆縹白素朱介青首朱目。號太平清領書。其言以陰陽五行爲家。而多巫覡雜語。有司奏崇所上妖妄不經。乃收滅之。後張角頗有其書焉」
- (2) 『太平經』の来歴や思想については多くの議論がある。以下の論文に簡潔にまとめられている。神塚淑子「『太平經』の世界」砂山稔、尾崎正治、菊地章太編『道教の神々と経典』講座道教第一巻、雄山閣出版、2000年、pp.76-92.
- (3) 『礼記』第九「礼運」新釈漢文大系第二十七巻、p.327「大道之行也。與三代之英。丘未之逮也。而有志焉。大道之行也。天下爲公。選賢與能。講信脩睦。(中略)是謂大同。今大道既隱。天下爲家。各親其親。各子其子。貨力爲己。(中略)衆以爲殃。是謂小康」
- (4) 『太平經』卷三十九「解師策書訣」王明編『太平經合校』中華書局、1960年、p.70「承者爲前。負者爲後。承者迺謂先人本承天心而行。小小失之。不自知用日積久。相聚爲多。今後生人反無辜蒙其過謫。連傳被其災。故前爲承。後爲負也」
- (5) 『太平經』卷三十七「試文書大信法」同書、p.54「天地開闢已來。帝王人民承負生。爲此事出也」
- (6) 『漢書』卷五十六「董仲舒伝」中華書局点校本第八巻、p.2498「臣謹案春秋之中。視前世已行之事。以觀天人相與之際。甚可畏也。國家將有失道之敗。而天乃先出災害以譴告之。不知自省。又出怪異以警懼之」
- (7) 同、p.2503「四方正遠近莫敢不壹於正。而亡有邪氣奸其間者。是以陰陽調而風雨時。羣生和而萬民殖。五穀孰而中木茂。天地之間被潤澤而大豐美。四海之內聞盛德而皆徠臣。諸福之物。可致之祥。莫不畢至。而王道終矣」
- (8) 『易経』上経坤卦「文言伝」新釈漢文大系第二十三巻、p.175「積善之家。必有餘慶。積不善之家。必有餘殃」
- (9) 『長阿含経』卷二十一「世記経三災品」大正新修大藏経第一巻、p.137b「有四事長久無量無限。不可以日月歲數而稱計也。云何爲四。一者世間災漸起壞此世時。中間長久無量無限。不可以日月歲數而稱計也。二者此世間壞已。中間空曠無有世間。長久迺遠。不可以日月歲數而稱計也。三者天地初起向欲成時。中間長久。不可以日月歲數而稱計也。四者天地成已。久住不壞。不可以日月歲數而稱計也。是爲四事長久無量無限。不可以日月歲數而計量也」